
重複障害ってなあに？

～学生ボランティアを通じて～

第1章 プロジェクトの概要など

1. 「重複障害ってなあに？～学生ボランティアを通じて～」の活動目的

重複障害とは、複数の障害を合わせもつことである。その中でも、障害の程度が重い場合を重度重複障害という。重度重複障害の子どもたちは、地域の特別支援学校に在籍している。また、通常の小・中学校にも、少数ながらも在籍する。

しかしながら、私たち学生は、重度重複障害の子どもたちと出会う機会がほとんどない。知識や経験が乏しいまま教員となることは、子どもたちにとっても、私たちにとっても不利益が大きい。

そこで、本プロジェクトを立ち上げ、

①まずは自分たちが、重度重複障害の子どもたちの様子や教育について知る

②自分たちが得た知識を広報することで、本学の学生の皆さんに、重度重複障害のことを伝え、学びを深めるきっかけとしてもらう

ことを目的に、活動を行うこととした。

2. 代表者および構成員

・代表者

鈴木 はるか 発達障害教育専攻 3回生

・構成員

片岡 菜月 発達障害教育専攻 3回生

3. 助言教員

小谷 裕実 先生（発達障害学科）

4. ボランティア協力校

京都市立呉竹総合支援学校

第2章 内容や実施経過

1. 特別支援学校でのボランティア

重度重複障害の子どもたちの理解を深めるために、特別支援学校でのボランティア活動を開始することとした。京都市立呉竹総合支援学校がご協力くださり、ボランティアが開始となった。

〈ボランティア活動期間〉

平成29年6月～平成30年3月（予定）

週に1回 午前中に実施

〈ボランティア活動内容〉

- ・小学部と高等部の配属学級、配属ユニットで指導の補助を行った。
- ・ボランティア後は、授業の様子、子どもたちの活動の様子、学んだこと、感想などを記録した。
- ・保護者から承諾をいただき、子どもたちの様子を写真に記録した。

2. 勉強会の開催

本学の学生に、重度重複障害のことを広報する一環として、勉強会を行った。勉強会をするにあたって、ビラ配りや、ポスターで宣伝を行い、参加者を募った。

（1）嚙下の勉強会

重度重複障害の子どもたちの中には、嚙下（飲み込み）が難しい人もいる。そこで、飲み込みについて考える、嚙下の勉強会を開催した。

【日時】平成29年7月14日（金）

①14：35～16：05

②16：20～17：50

（①、②とも同様の内容で実施した。）

【場所】京都教育大学 A 棟共通室 1A1

【参加者】13名

【内容】

- ・嚙下の仕組みについての講義
嚙下の仕組みについて、パワーポイントを用いて講義を行った。
- ・「飲み込むって難しい」体験
嚙下が難しいとはどういう状態なのか、実際に参加者とともに体験した。
- ・嚙下食の試食
嚙下食とは、嚙下しやすいように加工された食事

である。今回は、とろみを付けたお茶やペースト食を試飲、試食した。



〈とろみのお茶を作成〉



〈南瓜の煮物と、肉野菜のペースト食〉

・食事の介助の体験

重度重複障害の子どもたちに、食事の介助をするとき、どのようなことを工夫すると良いか、参加者同士で考えながら、食事介助を行った。



(2) スヌーズレンの勉強会

スヌーズレンとは、いろいろな感覚刺激を用いた物や空間のことで、リラクゼーションや療育などを目的に使用される。重度重複障害の教育について考える上で、スヌーズレンを題材とした勉強会を開催することとした。

勉強会をする前に、スヌーズレンについて学習した。その一環で、大阪にある福祉用具会社のスヌーズレンルームを見学させていただいた。



〈福祉用具会社のスヌーズレンルームを見学〉

【日時】

平成 29 年 10 月 20 日 (金) 16:05~17:50

【場所】 京都教育大学 A 棟共通室 1A1

特別支援センタープレールーム

【参加者】 17 名

【内容】

- ・スヌーズレンについての講義
スヌーズレンの理念や、感覚刺激について調べたこと、学んだことを発表した。



・感覚ゲーム

スヌーズレンは、感覚に働きかける教材である。感覚を研ぎ澄ませるゲームを行うことで、「感覚に働きかけるとは、どういうことか」を体験した。

・スヌーズレンルームの体験

福祉用具会社からお借りしたスヌーズレンと、手作りしたスヌーズレンを用いて、スヌーズレンルームを作成した。参加者には、自由にスヌーズレンルームを体験してもらった。手作りスヌーズレンには、e-Project「京教竹友会～竹の可能性を掘り起こせ！～」にも協力していただいた。



〈スノーズレンルームを楽しむ参加者〉



〈いろいろな感触が楽しめる、触るスノーズレン〉



〈色や泡の形が次々と変化するバブルユニット〉



〈お手軽に楽しめるミニスノーズレン〉



〈竹友会による竹スノーズレン〉



〈独特な感触が楽しいエアーマット〉



〈見ても触ってもおもしろい光ファイバー〉

3. 藤陵際

【日時】平成 29 年 11 月 10～12 日

【場所】京都教育大学 A 棟共通室 1A1

共通自習室 1A1

【内容】

スノーズレンルームの設営、運営を行った。1 日目は、ボランティア協力校の先生方のお力添えをいただき、特別支援学校の子どもたちをお招きした。特別支援学校から本学の移動には、福祉タクシーを使用し、先生方や看護師の方々が添乗してくださいました。子どもたちは、1 時間半ほど本学に滞在し、スノーズレンルームや藤陵際の雰囲気を楽しんだ。

3 日間を通して、本学の学生や地域の方々にも、スノーズレンルームを体験してもらった。スノーズレンルーム以外にも、説明ブースを設け、本プロジェクトの目的や、重度重複障害の説明、スノーズレンの理念や教育的意義について展示した。



〈手作りのスノーズレンルーム〉



〈竹友会の竹スノーズレンも再び登場〉

4. 図書館企画展

本学学生に、重度重複障害の子どもたちや、その教育について知ってもらうために、企画展「来てみてとくし展」を開催した。

【日時】平成 29 年 12 月 1 日(金)～12 月 25 日(月)

【場所】京都教育大学図書館企画展示室

【展示内容】

- ・本プロジェクトの活動内容
- ・ボランティアを通して記録した子どもたちの様子
(写真と説明文で展示)
- ・ボランティアを通して感じたこと、学んだこと
- ・特別支援学校の授業で実際に使用していた教材の紹介
- ・スノーズレンルーム

展示室にはアンケート用紙を設置し、来場者に任意で記入していただいた。



〈活動内容の報告〉



〈ボランティア記録〉

(※個人情報保護のため、写真は加工している)



〈展示室の一角にスノーズレンルームも設営〉

第3章 結果や成果など

1. 特別支援学校でのボランティア

重度重複障害の子どもたちと関わったり、授業に参加したりすることで、重度重複障害への学びを深めることができた。

ボランティア終了後は、毎回記録を付けることで、その日の子どもたちの様子や、学んだことを整理することができた。教師の働きかけの仕方、子どもたちの反応は変わる、私たちが気づけなかっただけで、子どもたちはたくさんのメッセージを伝えようとしていること、関わり方や教材には無限の工夫ができることなど、今まで考えが及ばなかったことまで学ぶことができた。

また、保護者の方々や先生方のご協力のもと、子どもたちの活動の様子を、写真に収めることができ

た。写真は、図書館企画「来てみてとくし展」に使用した。

2. 勉強会の開催

(1) 嚙下の勉強会

嚙下の勉強会を終え、参加者から、「重度重複障害に対する理解が深まった」、「実際に体験することで、嚙下についての理解が深まった」、「ペースト食やとろみのお茶の味が予想と違って驚いた」、「相手が食べやすいような介助方法を考える機会ができた」といった意見を得た。

勉強会を通して、重度重複障害の子どもたちの身体面について伝えることができた。また、食事や嚙下について考える機会を提供できた。

(2) スヌーズレンの勉強会

参加者の多くが、スヌーズレン初体験であった。スヌーズレンの勉強会を通して、重度重複障害児の教育を、具体的・体験的に伝えることができた。スヌーズレンルームは皆様から高い評価をいただき、スヌーズレンルームを見るために、時間を作って来てくださる方もいた。特に、手作りスヌーズレンは、「工夫すれば、自分たちでもスヌーズレンが作れるんですね。」と注目していただけた。

3. 藤陵際

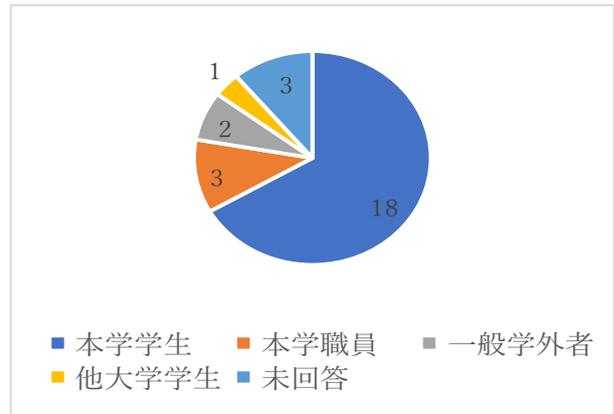
特別支援学校の子どもたちを招待し、手作りのスヌーズレンルームを楽しんでもらうことができた。子どもたちからは、笑顔や、一生懸命に目や手を動かす様子が見られた。子どもたちの様子から、スヌーズレンの意義を、身をもって感じ取ることができた。

スヌーズレンルームには、本学学生、地域の子どもたち、福祉関係の人など、さまざまな方が来場した。来場者からは、「重度重複障害のことをよく知ることができました」、「とてもきれいでリラックスしました」、「ずっとここにいたくなりますね」、「毎年こんなところがあったら良いのに」といった嬉しいお言葉をいただいた。3日間を通して、幅広い多くの方々に、重度重複障害や、その教育について伝えることができた。

4. 図書館企画展

企画展示室に常時滞在することができなかつたため、企画展来場者数は集計できなかった。任意で記入していただいたアンケートの総数は 27 枚であった。アンケートには①来場者内訳、②重度重複障害について知っていたか、③重度重複障害に対し抱くイメージ、④企画展を見て、重度重複障害に興味を持ったか、⑤感想の 5 点を記入していただいた。

①来場者内訳



アンケート回答者 27 名のうち、18 名が本学学生、本学職員が 3 名、一般学外者が 2 名、他大学学生が 1 名、3 名は未回答であった。本学学生の内訳は、発達障害教育専攻が 5 名、家庭科専攻が 3 名、英語・技術・理科・幼児教育専攻の学生が各 1 名、科目等履修生が 1 名、特別専攻科が 1 名、その他 4 名は不明であった。

②重度重複障害について知っていたか



アンケート回答者のうち、重度重複障害について、企画展来場前から知っていた人が 22 名、知らなかつた人が 4 名、1 名は未回答であった。

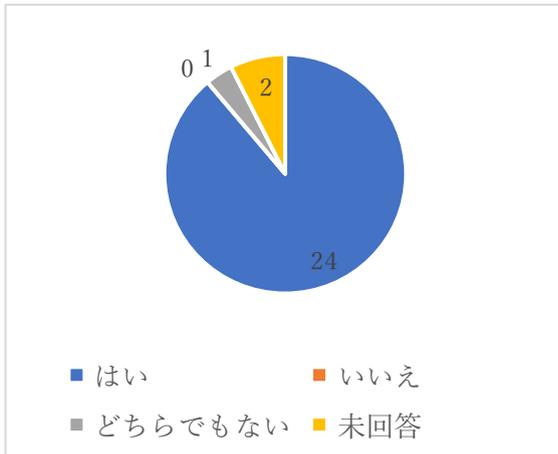
った人が4名、未回答が1名であった。

③重度重複障害のイメージ

重度重複障害について持っているイメージを、自由に記述してもらい、以下のような意見を得た。

- ・生活に困難を抱える
- ・他者からの援助・介助が必要
- ・寝たきり、身体が不自由
- ・コミュニケーションが難しい
- ・支援が難しい
- ・周囲の人々の理解や優しさが必要
- ・たくましい
- ・指導や支援にいろいろな可能性がある

④企画展を見て、重度重複障害に興味を持ったか



アンケート回答者のうち、興味を持ったと回答した人が24名、興味を持たなかったと回答した人が0名、どちらでもないが1名、未回答が2名であった。

⑤企画展に対する感想

企画展を見た感想を自由に記述してもらい、以下のような意見を得た。

- ・重複障害の現状について知れた。
- ・授業の実際や、現場の先生方が、子どもたちとどのように関わっているのかを知ることができ、とても勉強になった。
- ・企画展の写真を通して、子どもたちの様子が分かり、イメージを持ちやすかった。
- ・好きなことや、おもしろいと思った物に対し、子どもたちはとても良い表情をするのだと思った。

- ・企画展やプロジェクトの活動に参加することで、体験的に学びが深まった
- ・スヌーズレンルームがとてもきれいで癒やされた、おもしろかった。
- ・教師はいろいろなアイデアを考える必要があり、大変そうだ。

アンケート回答者のほとんどが、企画展を通して重度重複障害に興味を持ったことが分かった。また、「とても勉強になった」、「学びが深まった」等の感想も多く、重度重複障害に対する理解が、少しずつでも深まったのではないかと考えられた。

アンケート結果より、重度重複障害に対し、「生活に困難を抱える」、「不自由」といったイメージを持っていた方が多かったが、企画展を見た感想は、前向きな意見ばかりであったことが印象的であった。

これらの結果より、企画展を通して、来場者に、本プロジェクトの活動内容や、重度重複障害の子どもたちの様子、教育の実際を伝えることができた。

第4章 まとめと反省、今後の展望など

1. 特別支援学校でのボランティア

ボランティアを始める前、私たちは、「重度重複障害の子どもたちが抱える困難は多い。知識や技術を身につけ、より良い支援ができる存在にならなくては・・・」ということばかりを考えていた。しかし、実際に子どもたちと接してみると、子どもたちはとても生き生きとしていて、積極的で、私たちにもいつも新しい発見をさせてくれるような存在であった。子どもたちが持つ困難にばかり注目するのではなく、子どもたち一人一人のあり方を見つめ、可能性を広げることの大切さを学んだ。

また、現場の先生方を間近で見ることで、先生方の知識や技術の高さ、そして、自分たちの課題に気づくことができた。今回のボランティアを通して、一番感じたことは「私たちは、重度重複障害をはじめ、特別支援教育の実際について、分かっていないことだらけだ」ということである。これからも、謙虚に学び続けることが重要である。

2. 勉強会の開催

2回の勉強会を通して、参加者に、重度重複障害やその教育について伝えることができた。また、勉強会を開催するために、プロジェクトメンバー自身の学びを深めることができた。主催者側、参加者側双方の学びに繋がる企画であった。

しかしながら、重度重複障害について本学学生に広報するための勉強会であったにもかかわらず、参加者数を伸ばすことができなかつた。勉強会の前には、メールによるお知らせの配信、ビラ配り、ポスターの掲示等を行ったが、大きな効果は見られなかつた。

これには、勉強会の内容も関係していると考えられる。嚙下の勉強会、スヌーズレンの勉強会とも、高い評価をいただいたが、参加者の多くが、もともと特別支援教育に興味を持っている方々であった。もっと、いろいろな学生に参加してもらうためには、難しすぎず、かつ興味を持てる内容の勉強会（例えば、重度重複障害に関する映画鑑賞や講演会など）を検討する必要がある。

3. 藤陵際

藤陵際は、特別支援学校の子どもたちにスヌーズレンルームを楽しんでもらうことができた。普段のボランティアでは、指導の補助を実施しているが、藤陵際は、企画から運営まで、私たちが実施した。そのため、子どもたちがどのような反応を示すか、子どもたちが安心、安全に過ごせるよう、環境は整えられているか、当日まで不安が大きかった。

当日は、特別支援学校の先生方のご協力や、いろいろな学生の手助けのもと、子どもたちに楽しんでもらうことができた。自分たちの作り上げたもので、子どもたちがいろいろな反応を見せてくれたことは、本当に幸せで、楽しく、忘れられない経験となった。

今回は、多くの方のお力添えがあったからこそ、企画を成功させることができた。特別支援学校の先生方は、この日のために、多くの時間を準備に当ててくださった。子どもたちは、当日までの準備や、信頼する先生方の付き添いにより、安心して、スヌーズレンルームや藤陵際を楽しむことができたのだと思う。また、当日サポートしてくださった学生の

皆様のおかげで、大きなトラブルなく、終了することができた。他にも、手厚く対応してくださった福祉タクシーの方々や、大学祭実行委員の皆様など、多くの方の支えがあって実施できた。

特別支援学校の子どもたちをお招きできた一方で、反省点も上がった。まず、子どもたち用に設けた休憩室の広さが十分ではなかつた。車椅子に乗った子どもたちや、介助の先生方の人数を考慮して、もっと広いスペースを確保すべきであった。次に、トイレのスペースの環境整備が不十分であった。子どもたちが床に寝転んで安全に使用できるように、柔らかいクッションを敷く等の工夫が必要であった。そして、もっと早期に、当日の詳しい情報を、特別支援学校の先生方にお伝えする必要があった。今回は、このように、想定できていないことが多かつたため、今後に生かしたい。

3日間を通して、本学学生だけでなく、地域の色々な方に、本プロジェクトの活動を知ってもらうことができた。藤陵際期間中は、途切れることなく来場者があり、予想以上の反響となった。

3日間を通しての反省点としては、宣伝が難しかったということである。車椅子でも入れて、空調の管理ができる部屋を使用する必要があったため、あまり目立つ場所にブースを設営することができなかつた。結果、思った以上に宣伝が大変になってしまった。また、運営側の人数が少なく、慌ただしい運営となってしまった。

4. 図書館企画展

本プロジェクトの目的である「本学の学生の皆さんに、重度重複障害のことを伝え、学びを深めるきっかけとしてもらう」に沿った企画展となった。特に、子どもたちの様子を、写真を用いて紹介したことで、来場者の理解を深めることができた。

しかしながら、この活動においても宣伝面で課題が残った。図書館企画展開始前から最終日まで、ビラ配りやポスターの掲示などで宣伝活動を行った。企画展来場者数を集計することができなかつたため、実質的な結果は不明であるが、多くの方が来場したとは言いがたい。宣伝の方法や展示場所などを、もっと工夫するべきであった。

5. 全体を通して

本プロジェクトの活動はとても楽しく、学びも得られ、今後教員を目指す上で、かけがえのない貴重な経験となった。よって、一つ目の目的である、「自分たちが、重度重複障害の子どもたちの様子や教育について知る」に関しては、もちろん今後も学び続ける前提の上で、おおむね達成できたと言える。

しかしながら、2つ目の目的である、「本学の学生の皆さんに、重度重複障害のことを伝え、学びを深めるきっかけとしてもらう」ことに関しては、課題が残った。勉強会や藤陵際、図書館企画展の活動内容に工夫を凝らしても、まずは、活動に興味を持ってもらえなければ、参加者は増えない。重度重複障害について知ることが、どのような意義を持つのか、多くの学生に伝わるようにアピールする必要がある。障害児教育は、時にデリケートな問題を抱えるため、踏み込みにくい領域であるかもしれない。しかし、まずは知ることの意味がある。重度重複障害のことを知らない人に興味を持ってもらうためには、どのように伝えるべきかが今後の課題である。

また、本プロジェクトの活動メンバーが少ないことも課題となった。人数不足が故に、準備不足や運営が困難な場合が多かった。このプロジェクトの大切さや面白さを、より多くの学生に広めて、活動メンバーや、活動への参加者を増やしていきたい。

<参考・引用文献>

- ・文部科学省 HP www.mext.go.jp/
- ・クリスタ・マーテンス (2009)「スノーズレンの基礎理論と実際」(姉崎弘訳) 大学教育出版.
- ・渡邊早苗・寺本房子・丸山千寿子・藤尾ミツ子編 (2009)「保健・医療・福祉のための栄養学 第3版」医歯薬出版株式会社.
- ・中尾一成編(2011)「耳鼻咽喉科疾患ビジュアルブック」落合慈之, 学研.